

サンパウロ遠藤書店刊行『文化』の位置 付・総目次

和田 敦彦

はじめに

ここでは1938年から翌年にかけてサンパウロで刊行されていた邦字雑誌『文化』の総目次を作成した。当時のブラジルにおける日本語図書⁽¹⁾の流通状況と、この雑誌の特徴や役割についてここでは論じたい。遠藤書店が出版していたこの雑誌は、日本の出版物や読書に関する豊富な情報、記事を含んでおり、この時期の日本の出版物が海外にどのように流通、受容されたかをとらえるうえで恰好の素材と言える。

こうした海外への日本の書物の流れには、国家間の政治、経済的な要因とともに、各国の対外的な文化政策が深く関わっている。書物の流れは、こうした文化政策が、具体的にどういった人や組織を通して機能してきたのかを明かしてくれるものとなる。1937年の日中戦争開始後のこの時期、日本は対外的な文化事業を本格化していく。外務省文化事業部の予算は急増し、世界各地に日本文化会館を建設していく構想が具体化していく時期でもある⁽²⁾。

ブラジルにおける日系人社会では、台湾や朝鮮のような日本の植民地と、日中戦争開始後の華北や東南アジアの占領地とも異なる、日本の文化政策や書物の流れをとらえることが可能となる。後に述べるように、この時期、ブラジルでは日本の多様な出版物が読まれる読書空間が生まれており、現地でも邦字新聞、雑誌が刊行されている状況にあった。加えて、1930年代後半はブラジル国内でも国家による言語、文化統制が強まっていく時期でもある。1937年に議会を解散させ、独立政府を樹立したヴァルガス (Getúlio Vargas) 大統領のもと、ブラジルでは外国系ブラジル人の同化促進がはかられていく。1938年には14歳未満 (サンパウロ市、サントス市では10歳未満) の者への外国語教育が禁止され、翌年には外国語出版物取締法⁽³⁾で日本語出版物にはポルトガル語併記が義務づけられる。この雑誌の情報からは、こうした日本とブラジル双方の文化政策の中におかれた読書空間をとらえることも可能となろう。

1 邦字メディアの流通状況

雑誌『文化』の刊行された1930年代後半、ブラジルにおいて日本語出版物はどのような環境におかれていたのだろうか。日本からブラジルへの移民数は、ピークと

なる1933年には24,000人を越えるが、ブラジル政府による移民者の入国制限、いわゆる移民二分制限法の成立以降急減し、1937年には4,557人、翌年には2,524人となっている。それでも、1938年段階では日本人の総渡航者数は20万人に近くに及ぶ。当時の総領事館の調査によればサンパウロ市とその近郊のみでも1万人を越える日本人が在住している⁽⁴⁾。

邦字新聞では『日伯新聞』（1916～）、『伯刺西爾時報』（1917～）、『聖州新報』（1921～）、『日本新聞』（1932～）など、早くから刊行が始まっているが、1938年前後には多くが日刊に移行し、より規模の大きい企業形態となっていく⁽⁵⁾。いずれもサンパウロ市に拠点をもち、1938年時には『日伯新聞』が19,500部、『伯刺西爾時報』はそれに次ぐ17,000部を発行していた⁽⁶⁾。

これらの新聞には日本の書籍や雑誌を輸入販売する広告も豊富に見られる。特に『伯刺西爾時報』の広告を中心に、出版広告を調査したエドワード・マックは、1928年頃から書籍を専門に扱い始めた遠藤商店が、32年には「書店」として活動していったとする。また、同書店が巡回読書会や新聞広告を通した郵送販売で地方に販路を広げていたことも指摘している⁽⁷⁾。

とはいえ、サンパウロ州の各地に点在する日系人移民地を考える場合、商店、書店という店舗を通したルート以外にも多様な書籍、雑誌の流通経路があったことを意識しておく必要がある。前述の新聞社は、いずれも書籍の輸入販売や印刷業をも担っていた⁽⁸⁾。また、1933年に生まれた互生会のように、日系の協同組合が雑誌の出版や書店の経営、輸入書籍の販売まで担う事例もある⁽⁹⁾。

ブラジルでは1932年の協同組合法成立以降、各地で日系協同組合の組織化が進むが、こうした組合では購買部を設けて、日用雑貨を含めた注文、販売を取り次ぐこともなる。また、注文した本や雑誌を各植民地で読者にまで届ける事業は、各地の日本人会や青年会がその役割を担うことになる。1927年に生まれた汎リンス青年団の場合、1936年には三青年団の連合組織となるが、一年間の郵便物取扱量では雑誌類が10,000件、新聞は624,000件に及んでいる⁽¹⁰⁾。つまり出版物の制作や輸入、販売から、読者への取次、配送にいたるプロセスに、多様な形で各地の協同組合や日本人会、青年会、処女会が関わり、その流通を支えていたわけである。

アバレーの事例で具体的に見てみたい。サンパウロ市の250キロほど西にあるソロカバナ線のアバレーは当時500世帯ほどの邦人移民地があった。この移民地では1936年から『アバレー時報』が発行される。同地の小学校に勤め、この新聞の編集にも関わっていた紺野堅一は青年会の中心ともなっていた。彼はこの新聞社で「遠藤書店代理店」として書籍、雑誌の取次販売を行い、翌年6月にはアバレー書店として独立、9月には古本の取扱にまで事業を広げることとなる⁽¹¹⁾。ちなみにアバレー

ではこの頃、一ヶ月に250冊の邦字雑誌が売れており、ブラジルに輸入される邦字雑誌の1.25%に相当していた⁽¹²⁾という。

また、日本からブラジルへ日本語図書、雑誌を寄贈する活動として、先述のマックも触れている日本力行会の海外巡回文庫がある⁽¹³⁾。日本で寄贈によって集めた1万冊を越える図書、雑誌が、1921年にはブラジルのサントス港に届いている。ただ、ブラジル国内の文庫巡回は難しかったため、各地に分散、寄贈することとなった⁽¹⁴⁾。この場合に各植民地で窓口となるのもやはり前述の日本人会や青年会であり、いわば出版流通の中継点となっている。

では日本の出版物を各地で住民に提供する図書館についてはどうだろうか。移民を送り出した各国が、ブラジルで展開している文化政策については1936年の日本領事館の調査報告があるが、そこでは「外国人外国人経営の各学校倶楽部等ニ於テ付属図書館ヲ有スルモノアルモ特設公開セルモノ皆無ナリ」とある⁽¹⁵⁾。ブラジルで独立して公開されている日本語図書館はこの段階では確認されていない。

しかし、小規模な日本語図書館は実際には存在している。サンパウロ市から500キロ離れたノロエステ沿線のアリアンサ移民地は、1924年の建設以来、教員、官吏、牧師を含め多様な階層構成で知られるが、1930年に『アリアンサ時報』の発刊を始めている。そこでは、すでに同年、読書会を組織し、入会金を募って定期的に図書購入にあて、200冊以上の図書を備えた図書室が生まれている⁽¹⁶⁾。また、翌1931年には第3アリアンサに岩波書店からの寄贈図書をもとに図書館ができて⁽¹⁷⁾いる。

先述の1936年の領事館の調査報告ではまた、サンパウロ日本人学校父兄会の活動として「図書館ノ設置及巡回図書館ノ経営」が挙げられている。同会は1929年に、ブラジル各地の日系小学校の父兄会を統括する形で再編され、総領事館からの支援の窓口ともなった。ブラジルでは1932年段階で185校あった日系小学校は1938年には467校にまで増加する⁽¹⁸⁾。日本からの支援をもとに図書、雑誌を集め、各地の父兄会を通して小学校に分配する、あるいは巡回図書の形で貸与するわけである。報告書の段階ではまだこの事業には着手されていないが、1936年には地方を含めて32ヶ所の父兄会で、総計で単行本15,482冊、雑誌が8,095冊の図書が提供されている⁽¹⁹⁾。先述のアバレーにも同年からこの図書の配給がはじまっている⁽²⁰⁾。サンパウロ市の場合、この図書館は保証金を支払っての一般利用も可能であった⁽²¹⁾。この図書室について、『文化』の編集にもあたっていた安藤潔はこう記している。

文教普及会の図書室といふのもあるが、目的が一般の青年や少年を相手にした通俗的な書物が主で、それに冊数も少なくほとんどが特価本程度のものばかりで、ほんとうに良い本といふのは数へるほどしかない。(中略) 少し学究的

なものとなると全然役にたゝたない。⁽²²⁾

ブラジルにおいて日本の雑誌や書籍が流通し、現地でもまた多様な出版物が刊行されるなか、既存の読書環境にあきたらない当時の読書環境に対する批判的なまなざしもまた、すでに生まれていたわけである。

2 雑誌『文化』の創刊

雑誌『文化』の特徴は、こうした当時の読書環境を批判的にとらえ、質の高い読書の環境を作り出そうとしたところにある。そこでは読書が推奨され、読むべき雑誌記事や図書が積極的に紹介されていく。

この雑誌は、1938年11月に月刊誌として創刊され、翌年9月までに9冊刊行されている。前年創刊された文芸誌『地平線』の同人を吸収する形で、出版認可を受けた雑誌として遠藤書店から刊行された。東京外国語大学のポルトガル語科出身で、ブラジル時報社や日伯新聞社に籍をおいたこともある安藤潔が編集責任者であった。『地平線』の主要同人で早稲田大学仏文科を出た古野菊生や、東京大学経済学部出身で日伯新聞社の記者でもあった江見清鷹、そして画家の半田知雄らが稿を寄せている。遠藤常三郎が、経営する遠藤書店での販売書籍の広告をこの雑誌に掲載してもらうかわりに、出版費の大部分を負担し刊行する。遠藤は自身でもこの雑誌に記事⁽²³⁾を寄稿、誌上座談会にも参加している。

編集にかかわった半田知雄は移民史の著作『移民の生活の歴史』を戦後まとめるが、そこでも、この頃にはサンパウロ市では総領事館の吏員や嘱託、組合や日本人会の事務職、新聞記者などのホワイトカラー層がすでに形作られていたことにふれて⁽²⁴⁾いる。こうしたホワイトカラーによる読者層や、先の安藤、半田を含め、より客観的で、専門的な体系化された情報を求める読者層が生まれていたわけである。雑誌『文化』は、当時広く読まれていた大衆雑誌の『キング』や『講談倶楽部』には批判的な位置にあり「結局雑誌「キング」の域を出てゐない」といったように批判的なイメージでこれら誌名は用いられてもいる。半田知雄には詳細な日記が遺されて⁽²⁵⁾おり、1938年の日記には月遅れで読む『改造』、『中央公論』や『セルパン』の雑誌記事に関する言及や、刊行間もない春山行夫『現代詩の研究』、ブルーノ・タウト⁽²⁶⁾『日本文化私観』といった著述を読んでいることがうかがえる。

雑誌『文化』は、こうした新たな読書空間を積極的に作りだそうとした点にその特徴がある。日本の出版物でも評価の高い書籍や、教育、学術に関する図書を広く紹介するとともに広告・販売し、上記のような総合雑誌や文芸誌から記事を選んで⁽²⁶⁾は転載した誌面構成を作り上げていく。

ただ、『文化』のこうした特性やその役割は、これまでの研究で見過ごされてきた点でもある。『文化』について戦後論じたものとしては1949年の『移民四十年史』が早い。「邦人社会を風靡した国粹主義と全体主義に反抗して、ブラジル永住と同化を主張した」点、また「日本文化を批判的な態度によつて研究し、これを二世に紹介することに努力した」点⁽²⁷⁾をとりあげて評価している。

しかし、これを書いたのは『文化』を編集していた安藤潔自身であり、かつ日本の敗戦間もない時期でもあり、『文化』掲載の自論を含めたごく限られた論説のみを評価する形で雑誌を説明している点に問題がある。創刊号の冒頭には日本浪漫派の浅野晃の「ルネッサンスの意義」をかかげ、小説「麦と兵隊」を転載するこの雑誌を、日本の国粹主義や全体主義に対抗するイデオロギーで一元的に説明するには無理がある。

『文化』はまた、先に述べたように文芸同人誌『地平線』の同人が合流していることもあり、ブラジルにおける移民文学、コロンビア文学の歴史においても言及されてきた。しかし、移民地において独自に創造される文学表現という観点にたつと、『文化』は評価の埒外におかれてしまう。この雑誌は既存の雑誌の紹介や転載に力点がおかれているため「『地平線』同人のあたりさわりのない随筆数編を含むだけで、創作は皆無」⁽²⁸⁾と評価されるしかない。

特定の論説のみを切り取って論じる場合、あるいは創作というジャンルの表現だけに絞って評価を下そうとする場合、この雑誌全体の重要な特性が見落とされてしまう。しかし、雑誌全体の情報を通してとらえるなら、この雑誌が移民地における読書環境自体に関わり、作用していった点を重視すべきであろう。こうしたアプローチとして、戦前の遠藤書店の販売活動をとらえた前述のエドワード・マックの視点が有効となろう。ただ、そこでは遠藤書店の販売活動については論じられているものの、この時期の遠藤書店や、その印刷、出版活動についてはいまだ考察がなされていない。遠藤書店は1936年には印刷機を導入し、この時期には書籍販売部以外に印刷部も設け、出版事業にも関わっていくのである⁽²⁹⁾。

3 『文化』の特性と可能性

遠藤書店と連携した事業としてこの雑誌をとらえるとき、書籍広告を含めた出版情報が豊富に含まれていることが注目される。創刊号で広告されている書籍のタイトル一覧を以下に掲げたが、重要なのはそこで選ばれ、広告されている書籍が、娯楽よりも文学、哲学などの学術書を含む、いわば教養ある出版物である点なのである。

この雑誌は何より新たな読書空間をサンパウロという移民地において構築しよう

著者	書名
加藤咄堂	群を抜くには
永田秀次郎	青嵐隨筆 九十五点主義
友田金三	標準ブラジル語
河合栄次郎	学生と生活
遠藤商店	昭和十四年当用日記
賀川豊彦	第三紀層の上に
賀川豊彦	その流域
萩原井泉水	俳句の作り方と味ひ方
武者小路実篤	人生読本
レフ・トルストイ	人生読本
新渡戸稲造	人生読本
菊池寛	日本女性読本
伊藤道禪師	人生問答
新井石禅	菜根譚詳解
新井石禅	般若心経講話
アンドレ・ジイド	未完の告白
アンドレ・ジイド	ジイド読本
山本有三	真実一路
山本有三	生きとし生けるもの
大谷光瑞	光瑞縦横談
千葉亀雄	ペン縦横
久米正雄	二階堂放話
直木三十五	隨筆集

著者	書名
滝井孝作	折紫隨筆
室生犀星	印刷庭苑
平山蘆江	人間道場
大日本雄弁会	永井柳太郎大演説集 第一集
大日本雄弁会	永井柳太郎大演説集 第二集
大日本雄弁会	青年雄弁集
大日本雄弁会	現代青年雄弁集
沢田謙	世界十傑伝
室伏高信	戦争と平和
エーリッヒ・ボーダッハ	ニイチエ研究
和木清三郎	唐詩選講義
竹村清	ドストエフスキー
近衛文麿	近衛公清談録
大槻憲二	現代日本の社会分析
改造社版	大魯迅全集 三卷
勝野金政	ソヴェート滞在記
鈴木氏亨	菊池寛伝
徳富猪一郎	蘇峰自伝
佐々木信綱	九条武子
武藤貞一	無敵日本軍
神田計造	日支事変と次の日○戦争
平田晋策	われ等の陸海軍
菊池寛	世界大戦物語

としていった点にその特徴がある。そうした特徴として第一に、この雑誌が教養を意識した日本語出版物の選書、紹介を行ったことが指摘できよう。そして第二に、この雑誌が移民地の出版や読書環境について意識化し、問題化していった点を重視したい。第三に、この雑誌が読書という行為自体を自省し、価値づけていった点も指摘しておきたい。

第一の特徴として、教養を意識した日本語出版物の選書、紹介をあげたが、その点で無視できないのがこの雑誌の内容と密接に結びついた出版広告である。先に創刊号における出版広告のタイトルを掲げたが、これらは内容紹介文を付して広告されている。この雑誌の全広告の9割以上がこうした紹介文を含んでいる。これらは遠藤書店が独自に付した文章も多く、例えば吉屋信子『わすれなぐさ』の場合、内容紹介の最後には「邦人小学校卒業程度の少女なら面白く読めます」と紹介されている。つまり、移民地に向けた独自の広報文が作られているわけである。菊池寛『文章読本』については、詳しい説明のあとに「殊に第二世諸君に副読本としてすゝめる」とある。講談社の出版物では『講談社の絵本』の全頁広告が見られるが、そこには「日本語教育が禁止されてゐる折柄、教育的絵本を御子様にと与へる事は刻

下の緊急時であります」という紹介文も見られる。⁽³⁰⁾

移民地の読者の教育、教養に役立つ図書をこうした広報文を添えて豊富に紹介するこの雑誌は、その記事中においても図書の推薦や紹介を行う。「文芸読本」欄では『源氏物語』（2号）や島崎藤村『仏蘭西便り』（3号）などの抄録、紹介がなされ、茅野迅による「欧米で評判の名著」欄は毎号のように掲載されている。加えて、「読書顧問」欄を設けて、読者からの質問に応じて島崎藤村の著作を紹介し（1号）、日本歴史に関する学術書を解説も行っている（2号）。つまり、レファレンスまで誌面で行っているわけである。

この雑誌の第二の特徴としてとりあげたいのが、移民地の出版や読書環境について意識化し、問題化していった点である。具体的には、ブラジルにおける邦字新聞や文芸について論評する、「邦字新聞は多過ぎるか」（S.S.S. 1号）や「邦人文壇の回顧」（野口武二 2号）、あるいは鈴木正司の「新聞文芸展望台」（4号）、「新聞文芸展望」（7号）などがあげられよう。重要なのは、こうした視点が、対照される日本国内の出版の動向や論壇に対する批判的な距離をも作り出している点である。阿部真之助「今年の母国出版界を顧みる 右翼物への頂門の一針」（2号）や関口次郎「雑誌論壇に於ける日本精神の批判」（2号）など、対照される日本国内、特に日本論や日本精神を盛んにとりあげる論壇から一步はなれた、批判的な距離をも作り出している点であろう。

また、先に引いた安藤全八「図書難」（1号）の、図書館を含めた、移民地の読書環境への批判的な視点も忘れてはなるまい。特に、こうした論が、単なる移民地の図書や読書の量的な充実を求めているのではなく、学術情報を含め、広く情報を対照し、検討していく環境の必要性を論じている点に注意しておきたい。「片々録」（6号）では、各国の日本研究機関についてふれながら、「二十万も日本人があるブラジルに、日本研究の何等の施設もないといふことは恥しい」として、第一に「日本文化図書館の設置」が必要であることとする。

第三の特徴としては、この雑誌が読書という行為自体を価値付け、意味付けている点があげられる。兵士や過去の武将もまた読書に親しんでいることをとりあげた「出征兵士と読書（読書美談）」（無記名 1号）や「武人と読書 書に親んだ武将達の話」（水野広徳 1号）、そしてまた農村における読書環境の向上や、良書の必要性について論じた「良書によつて思想を養へ」（関口次郎 1号）、「純農の立場から」（結城哀草果 7号）などがこうした記事にあたる。

また、4号から企画された「読書宣伝 懸賞募集標語」もこうした取り組みとしてあげられよう。この企画は「読書が社会の文化発展のため、どんなに必要であるかを現はす標語」⁽³¹⁾の懸賞募集であった。

この雑誌が、読書行為や出版環境を批判的に意識化していった点、そしてそれによる幅広い知への希求やその問い直しがなされていった点をここでは評価しておきたい。だからこそ、「日本主義」や「日本精神」を盛んに喧伝する日本の出版状況への批判的な距離が生まれ、そもそも「日本」や「日本文化」が移民地や二世にとって自明のものでも不変のものでもないことが述べられもする⁽³²⁾。

ただそれは、この雑誌が日本の国粋主義やファシズムへのイデオロギー批判の立場をとっていたからではない。『源氏物語』に「大和魂」や「国家精神」を見出していく久松潜一の論もまたこの雑誌には掲載されている⁽³³⁾。むしろ重要なのは、「国民的な感情や民族的な感情が衝動的に興奮してゐる」といったメディア状況に対する批判的な距離感をこの雑誌が作り出している点なのである。こうしたスタンスの中で、日本の文化、言語、血統のつながりや永続性の自明性を疑う、安藤や半田の論説を位置づけることができよう⁽³⁴⁾。

もっとも、これらの記事や広報内容を見るとき、『文化』が広範な読者というよりも限られた知識人層の中での享受であった可能性もある。だが、知識人層が移民共同体に果たす役割もまた軽視できない。佐々木剛二は、移民共同体における知識人層の役割を改めて注目し、移民共同体を指導し、組織する「統合」の作用と、移民共同体を見つめ直し、語り、表象しようとする「再帰性」を通して移民共同体に作用していった点に関心を向けている⁽³⁵⁾。ここで述べてきた『文化』の特徴が、こうした指向性を生み出す母体ともなり得たことは充分考えられよう。

また、先述した「読書宣伝 懸賞募集標語」企画には、その応募、入選者の住所が示されている。応募者の分布を見ると、応募者の駅名を見ると、ノロエス沿線ではリンス、アラサツバからミランドポリスまで、ソロカバナ沿線ではパラグアスー、ランシアリア、プレシデンテ・ウエンセスラウと広く州内に分布している他、パラナ州クリチバからも応募はあり、サンパウロ市内に限らず広く流通していたこともうかがえる。

この雑誌では、読書や出版環境自体に意識的になることを通して、日本精神や日本文化の自明性や純粋性を疑う場を作り出していた点を論じてきた。一元的な価値観を問い直すこうした姿勢は、この雑誌の小説メディアの扱いにも反映している。また、この雑誌はポルトガル語による日本文化紹介にも特徴がある。こうした点も含めたこの雑誌の果たした役割については、稿を改めて論じたい。

付記 調査にあたってサンパウロ人文科学研究所、弓場農場北原・輪湖記念館や、サンパウロ大学から支援、協力を頂いた。この場をかりて感謝したい。

- (1) サンパウロ人文科学研究所蔵。
- (2) この時期の各地の日本文化会館とその所蔵資料については米国の事例、及びベトナムの事例について論じた。拙著『書物の日米関係』（新曜社、2007年2月）、及び拙論「在仏印文化会館関係資料について ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査」（『リテラシー史研究』11号、2018年1月）を参照。
- (3) 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史 下巻』（1941年12月、同刊行委員会）。
- (4) 同注（3）。
- (5) 半田知雄『移民の生活の歴史』（1970年6月、サンパウロ人文科学研究所）。
- (6) 日本移民80年史編纂委員会『ブラジル移民八十年史』（1991年6月、移民80年祭祭典委員会）。
- (7) Edward Mack「日本文学の「果て」サンパウロの遠藤書店」『立命館言語文化研究』20巻1号、2008年9月。
- (8) 同注（6）。
- (9) パウリスタ新聞社『コロニア五十年のあゆみ』（1958年10月、パウリスタ新聞社）。
- (10) 同注（5）。
- (11) 『アバレー時報』（1936年5月10日）、同（1937年6月10日）の掲載広告より。
- (12) 「アバレーに入る雑誌一ヶ月に二百五十冊」（1937年9月10日『アバレー新聞』）
- (13) Edward Mack, "Diasporic Markets: Japanese Print and Migration in São Paulo, 1908-1935," Bulletin of the Bibliographical Society of Australia and New Zealand 29 (2006).
- (14) 『ブラジル時報』掲載の記事（1922年1月13日、1921年12月2日）からその経緯をうかがうことができる。
- (15) 外務省文化事業部「昭和六年 伯国ニ於ケル外国人文化事業ノ概要」（1931年6月、JACAR B10070612600）。
- (16) 「アリアンサ読書会生る」（『アリアンサ時報』1939年8月22日）。
- (17) 第三アリアンサ移住地開拓六十年記念写真集編纂委員会『第三アリアンサ移住地開拓六十年記念写真集』（1990年、同第三アリアンサ区長会）。
- (18) 根川幸男『ブラジル日系移民の教育史』（2016年、みすず書房）。
- (19) 『ブラジル時報』（1936年8月5日）。
- (20) 「青年巡回文庫図書到着」（『アバレー新聞』1936年10月25日）、及び「教育普及会編纂教科書当アバレーに到着」（『アバレー新聞』1937年2月20日）。
- (21) サンパウロ市父兄教育会は、1936年3月に日本人教育普及会に改組する。さらに37年10月には日本文教普及会となる。
- (22) 安藤全八「図書難」（『文化』1号、1938年11月）。
- (23) 遠藤常三郎は「渡泊当時を顧みて」（『文化』7号、1939年6月）を執筆している他、「座談会 子弟の教育を語る」（『文化』2号、1938年12月）に参加している。
- (24) 同注（5）。
- (25) 関口次郎「良書によつて思想を養へ 特に農村青年及び学生諸君に望む」（『文化』9号、1938年11月）

- (26) 『半田知雄日記』(サンパウロ人文科学研究所蔵)による。
- (27) 香山六郎『移民四十年史』(1949年11月、香山六郎)。
- (28) 細川周平『日系ブラジル移民文学 I』(2012年12月、みすず書房)。
- (29) 馬場秀吉「新設の遠藤書店印刷所に働く」(『力行世界』1936年8月)。遠藤は日本力行会の出身であり、ブラジルでは会員の受け入れや世話も行ってた。
- (30) 「講談社の絵本」広告(『文化』2号、1938年12月)。
- (31) 入選の発表は8号でなされ、入選者十名には雑誌『文化』一年分が贈呈されることになっていたが、『文化』は次の9号で終巻を迎える。
- (32) 半田知雄、他7名「第二世諸君と日本文化を語る」(『文化』1号、1938年11月)。
- (33) 久松潜一「源氏物語と大和魂」(『文化』4号、1939年2月)。
- (34) 無署名「文化随想」(『文化』1939年2月)。
- (35) 安藤全八「ブラジル永住の文化史的新課題」(『文化』8号、1939年7月)。や半田知雄「永住と混血の問題」(『文化』2号、1939年4月)など。
- (36) 佐々木剛二「統合と再帰性 ブラジル日系社会の形成と移民知識人」(『移民研究年報』17号、2011年)。

1号(1938年11月1日)		
無記名	発刊の辞	1-1
浅野晃	ルネッサンスの意義	2-6
半田知雄	文化創造の意義(読書と人生)	6-8
関口次郎	良書によつて思想を養へ 特に農村青年及び学生諸君に望む	9-12
堂本印象	読書漫筆	13-14
水野広徳	武人と読書 書に親んだ武将達の話	14-15
加田哲二	読書の指導について	16-16
全八生	文化随想	17-17
無記名	室生犀星の詩	19-19
古野菊生	青年アンドレ・ジード	21-24
半田知雄/平田進/島田嘉春/高橋誠敏/山城柳清/マリオ・ミランダ/安藤全八/古野菊生	第二世諸君と日本文化を語る	26-33
徳富蘇峰	武士道精神を語る	35-39
武者小路実篤	牟礼随筆	40-41
洪沢秀雄	シンガポールの夜	42-43
橋本梧郎	生物を愛する心	43-46
安藤全八	図書難	46-49
竹内謙二	金を溜める楽しみ	50-51
無記名	片々録	52-53
無記名	読書顧問	55-56
久野新人	邦商の飾窓を斬る	57-58
S.S.S.	邦字新聞は多過ぎるか	59-60,63
無記名	社会時評	62-63
無記名	出征兵士と読書(読書美談)	63-63
野口武二	聖市だより コンデ街より	64-67

「地平線」同人	「地平線」誌友諸君へ	66
遠藤書店	第一回植民文学賞について	68
谷信一郎	坪田譲治著 風の中の子供	69-71
K・A・D	シヤラーサ小伝	73-76
火野葦平	麦と兵隊	78-88
無記名	午後三時	94-95
無記名	俳句	95-95
無記名	編集室	96-96
無記名	Appresentando-nos...	3-3
Bunzaburo Banno / M. M.	O Sentimento Estético na Civilização Japonêsa	4-7
無記名	Kitasato, o Eminente Discípulo do Grande Koch	6-10
Ruy Barbosa	Pátria	10-10
2号(1938年12月1日)		
阿部知二	日本人の再認識 生活の若さと文化の古さ	2-4
安藤全八	同化の根本的な問題 邦人社会の特殊部落化を憂ふ	5-8
宮沢俊義	人種問題の悩み 血の反発	9-14
無記名	文化随想	15-15
賀川豊彦	阿波の鳴門 世界のローレライ(随筆)	17-18
XYZ	漫録往来	17-27
伊藤忠太	貧富	18-20
杉浦翠子 選	聖征六佳選	20-20
尾木平吉	日本の提灯おどり	21-23
野口武二	邦人文壇の回顧	23-27
岡倉天心/村岡博訳	活花の精神	29-31
阿部真之助	今年の母国出版界を顧みる 右翼物への頂門の一針	33-34
関口次郎	雑誌論壇に於ける日本精神の批判	34-36
P・C・L	民族の問題(評論二)	36-37
無記名	よく売れた本	37-37
A・H・O	今年の横綱 宮本武蔵と大地(大衆文芸)	38-38
無記名	片々録	40-41
無記名	読書顧問	42-43
中西周甫	ラウル・ボツブ君を語る	44-47
無記名	野村忠三郎(話題の人物)	48-48
茅野迅	キウリー夫人 上 世界的に読まれた本	49-51
宮腰千葉太/大河内辰夫/ 坂元靖/木村義臣/安藤全 八/遠藤常八郎	座談会 子弟の指導を語る	52-57
無記名	文化春秋	58-59
無記名	日曜問答	60-65
N・S	貝殻追放	60-65
無記名	夕顔 源氏物語(文芸読本)	66-66
スウヴェストル	窓から眺めて学ぶことども(文芸読本)	67-67
無記名	時評	75-76
HN生	サンパウロ便り	77-78
無記名	午後三時	79-79
無記名	編集室	80-80
Tomodaxi	À Geração Japonêsa no Brasil	3-4
J. B. Dubieux	Historia do Budismo no Japão	5-9

Dr. Abrahão Blay	Formação do Espírito Japonês	10-11
Ikuma Arishima / M. M.	A Caligrafia como Elemento de Nossa Educação	11-13
Shinti Kamiya	Exploração Arqueológica na Colônia Aliança	14-14
3号(1939年1月1日)		
無記名	戦場の一風景	口絵
室伏高信	文明前途	2-5
江見清鷹	教育問題と青年の任務	6-8
半田知雄	味わひの深さ(随筆)	9-11
細江静男	飽食と粗食の利害	12-14
高神覚昇	大和のこゝろ	14-16
白崎亨	西洋人の心持	16-18
茅野迅	ローマと移民	18-19
ジオアン・ギラマンエス	忘れられて	18-18
無記名	「若い人」と検閲(図書評壇)	20-22
XYZ	世界に誇る日本画の知識	23-25
横川三郎	巨匠の逸話	26-28
無記名	文化随想	29-29
野口米次郎	歌麿の美人画	30-31
大倉雄峯	植民地哀話	32-33
A・Z	書齋をのぞく 切抜趣味の杉山英雄氏	34-34
無記名	第一回植民文学賞について	35-35
谷信一郎	我流文芸観 火野葦平の『土と兵隊』	36-37
西野四緑	古関徳弥(話題の人物)	38-38
溪舟生	サンパウロ便り	39-42
茅野迅	キウリー夫人 中 世界的に読まれた本	43-45
島崎藤村	仏蘭西便り(文芸読本)	46-46
芭蕉	奥の細道(文芸読本)	47-47
全八生	片々録	48-49
真木蒼人	ベルナムブコの蟹	50-51
無記名	ホトトギス入選句	51-51
杉山帆影	ブラジル文学に現はれるインヂオ	52-54
市毛暁雪	ブラジル創世記 インヂオの伝説	55-58
白山人	日本に帰つた人々	59-63
無記名	新聞と社会(時評)	64-65
火野葦平	土と兵隊	70-78
無記名	編集室	79-79
Eme	Pintura Japonêsa	3-5
Shiniti Kamiya	Exploração Arqueológica na Clônia Aliança	6-8
無記名	Li Po, o <<Anjo Desterrado>>	8-11
Terencio Andretta	Crônica Florida	12-13
Antonio N. Saratani	Perigo Amarelo	13-15
4号(1939年2月1日)		
無記名	セツテ・バーラス植民地の「童夢」クラブ	口絵
無記名	近々サンパウロ市に舞踊学校を設立する島晴美夫人の舞踊姿	口絵
長谷川如是閑	文明の典型と文化の形態 殊にアメリカ文化について	2-6
古関徳弥	ブラジル永住の意義を見出せ	7-9
井上新一	帰国希望者、北支てん向者に与ふ	10-12
島津久基	世界的名作源氏物語	13-15

久松潜一	源氏物語と大和魂	15-18
遠藤書店	第一回植民文学賞について	18-18
「文化」編集部	読書宣伝 懸賞募集標語	19-19
T・O・K	読んだ本の中から	21-22
徳尾溪舟	ブラジルの良さ	22-26
無記名	ホトトギス十二月号入選句	25-25
半田知雄	雑感一束	26-29
松村俊明	「童夢クラブ」	29-31
無記名	文化随想	33-33
田村剛	世界に誇る日本式庭園	34-36
紫峰生	日本庭園を訪ねて	36-38
杉武夫	リンス便り	39-40
白山人	ブラジルを訪れた人々	41-45
鈴木正司	新聞文芸展望台(投稿)	46-49
無記名	中西、葛岡問題をめぐつて(時評)	50-52
茅野迅	キウリー夫人 下 世界的に読まれた本	54-57
無記名	片々録	58-59
全八生	青年会訪問記	60-61
遠藤書店	遠藤書店取次雑誌	66-66
光沢雪夫	喜劇「血は水よりも濃し」	67-72
佐藤俊子	侮蔑	73-83
無記名	編集室	84-84
Tomodaxi	Romance Antigo	3-4
Shimizu Ikutaro	A Missão do Nacionalismo, Honem, Nação, e Mundo	5-8
Seishi Nippak Bunka Kenkyukai	Grêmio Cultural Brasileiro-Japônico	9-9
Pedro Aletto	Psicologia do Japonês	10-11
Takeshi Fukukawa	Literatura Japonêsa	12-14
5号(1939年2月1日)		
鈴木	馬肥ゆ	口絵
無記名	第二回アバレー青年連盟雄弁大会	口絵
谷川徹三	世界的日本人への道徳	2-6
白山人	わしが国さ 一(移民人国記)	7-13
水谷卜城	夏小品	13-13
永田泰三	詩について	14-16
野口武二	ブラジルよいとこ	16-18
永田泰三	詩二編 雑誌文化のために 植民文学	18-18
無記名	文化随想	19-19
無記名	第二回アバレー青年連盟雄弁大会記	20-20
花井誠	一等当選 国家的遺産	21-23
黒崎泰一郎	二等 操縦桿を握りしめて	23-25
大田原幸一郎	意気と信念	25-26
無記名	大会の感想	26-27
樋爪禎太郎	チエンパレーン家と宇津救命丸	28-30
石川芳園	自句の生地をしたひて	30-33
無記名	ホトトギス一月入選句	32-32
原/細江/鎌田/今田/奥村/竹内/安藤全八/江刺家勝	邦人社会の衛生を語る(座談会)	34-41

AZ	中西武官(話題の人物)	42-42
YK	鈴木威(話題の人物)	43-43
無記名	娯楽室	44-44
高橋誠敏	第二世の心情	45-46
茅野迅	欧米で評判の名著 II 南米仏領ギアナ植民地 脱走囚の手記(上)	47-51
安藤全八	アバレー付近のインディオ遺跡	52-53
無記名	サンパウロ便り	54-55
無記名	編集室	56-56
Tomodaxi	Haikais Brasileiros	3-4
Mamir	A Tia Imortal	5-6
Takeshi Fukukawa	Literatura Japonêsa	6-10
6号(1939年4月1日)		
高岡由也	リオ風景	口絵
無記名	秋色満つ	口絵
無記名	奉祝天長節	1-1
半田知雄	永住と混血の問題	2-6
青木節一	海外の日本学研究	13-14
無記名	片々録	15-16
白山人	わしが国さ(二)(移民人国記)	17-25
古野菊生	セルトンの恐威 バンデイランテ(ブラジル歴史物語)	26-31
永田泰三	自然詩	32-34
永田泰三	詩 朝霧/夕暮/泉	34-35
全八生	空中雑感	36-37
石川芳園	武彦と社会鍋	38-41
遠藤書店	第一回植民文学賞について	41-41
T・H生	サントス紀行	42-45
江見清鷹	ブラジルに於けるドイツ移民の輝かしき文化	46-56
念腹選	近詠十歌	58-59
茅野迅	欧米で評判の名著II 南米仏領ギアナ囚人植民地 脱走囚の手記(中)	60-65
T・H	高岡由也(話題乃人物)	66-67
伊藤陽三/鷲塚時哉/江見清鷹/茂木清吾/安藤全八	座談会 邦人社会と時事経済問題を語る	68-82
積田三郎	労働靴(創作)	83-94
無記名	編集室	98-98
Da Revista Carioca	O Pintor Takaoka	3-4
M.	Federação Industrial do Japão em S. Paulo	5-6
Takeshi Furukawa	Literatura Japonêsa, Época Arcáica e Clássica	6-10
7号(1939年6月1日)		
古関徳弥	文化人ジャポネースの子孫	2-4
結城哀草果	純農の立場から	6-7
谷川徹三	上海瞥見	7-8
武者小路実篤	支那人と日本人	8-9
念腹選	近詠十歌	10-11
城島益治郎	渡辺孝氏のことども	12-13
中西周甫	渡辺孝君を憶ふ	13-15
T・O・K生	山本喜誉司論(話題乃人物)	15-16

古野菊生	砂糖黍の渡来(ブラジル歴史物語)	17-19
無記名	チエテ便り	19-20
茅野迅	欧米で評判の名著 Ⅲ 南米仏領ギアナ植民地 脱走囚の手記(下)	21-26
堀田野情	民謡	26-26
小山三郎	日本映画雑感	27-30
江順近	「労働靴」評	27-29
遠藤常八郎	渡伯当時を顧みて	31-33
南仙子	こひ(俳句)	33-33
茂木治子	今こそ其の時 北米の排日に鑑みて	34-35
鈴木正司	新聞芸芸展望	37-39
北島文子	現代と結婚問題	40-43
無記名	編集室	44-44
José Sant'Anna do Carmo	Lendas e Contos das Fadas	3-6
Tomodaxi	O Brasil e os Filhos de Japonêses	7-8
Coelho Néto	A Estrêla de Buda	9-11
Akio Kasama	O Islam e o Japão	12-14
Mário Miranda	O Nipom e o seu Imperador	15-16
Takeshi Furukawa	Literatura Japonêsa	17-18
8号(1939年7月1日)		
安藤全八	ブラジル永住の文化史的新課題	2-6
中村真次	日本文化の放出	7-10
無記名	五月号ホトトギス入選句	10-10
田中耕太郎	新渡戸先生と倫敦の思出	11-14
無記名	社会時評	15-16
無記名	輪湖俊午郎論(話題乃人物)	17-18
水谷卜城	しゅろ	18-18
無記名	文化随想	19-19
念腹選	近詠十歌	20-21
白山人	わしが国さ(三)(移民人国記)	22-30
石川芳園	郊行一日	31-32
江見清鷹	農業の不安定	33-36
古野菊生	ブラジル歴史物語 黄金狂時代	37-40
嶋甍生	人外魔境の高原 シンガー・アラグイア縦横記	41-53
全八生	片々録	54-55
野口米次郎	われ日本人なり	56-58
遠藤書店	第一回植民文学賞に就て	59-59
茅野迅	中南米縦断記 馬背涉破一万里(上)	60-67
無記名	国際大和撫子道場 瑞穂学園	70-71
無記名	新法令に準じて「文化」の編集方針を改新	72-72
無記名	文化八月号予告	73-73
無記名	読書宣伝標語 入選発表	74-74
無記名	編集室	76-76
9号(1939年9月1日)		
無記名	Nossa Idéia	4-4
無記名	Grêmio Cultural Brasileiro-Nipônico de São Paulo	5-5
無記名	Madrigal para o Amor do Oriente	6-6
Tomodaxi	Contos Japonêses, Momotaro	7-10

Takeshi Furukawa	Literatura Japonêsa	11-16
S. Martina	Os Filhos de Japonêses	16-17
Xis	2 Acrósticos	18-18
無記名	Lições de Português 葡語研究 Curso Primário 初等科	19-24
無記名	(;)と(:)の訳し方	24-24
無記名	Lições de Português 葡語研究 Curso Secundário 中等科	25-28
無記名	Lições de Português 葡語研究 Curso Superior 高等科	29-31
無記名	Conversação em Estilo Respeitoso ていねいな会話の仕方	32-32
無記名	AとParaの用ひ方	33-33
無記名	O Boi do Melchior メルシオールの子	34-37
無記名	Sentar-se 腰かける、座るの用方	38-38
無記名	Lições de Japonês, Katakana	39-42